

国士舘大学蔵『伊勢物語』の研究（二）

松野 彩

修士課程 鈴木 健太郎

二〇二三年度・中古ゼミ四年生

一、はじめに

本稿は、二〇二二年度に続き、国士舘大学所蔵の室町末期の書写とされる『伊勢物語』の写本について、本学・中古ゼミの大学院生、四年生が翻刻を行ったものに、学習院大学蔵本および、千歳文庫蔵本との異同を確認し、国士舘大学蔵本の位置づけを確かめる試みである。

書誌情報については、前稿^{註4}に記載した通りである。各ページの行数については、本稿の対象範囲（五丁裏から十丁裏まで）では、一ページにつき十行で、前稿で扱った範囲と同じであった。

以下、本稿（二〇二三年度）では、六段の途中から十六段の途中まで、すなわち、前述したように五丁裏から十丁裏までを研究対象とした。以下、「二、翻刻」「三、考察」の順に検討を加える。

二、翻刻

《凡例》

*各写本の略記号は以下の通りである。

【国】… 国士館大学蔵本

【学】… 学習院大学蔵本

【千】… 千歳文庫蔵本

*【国】の本文を、丁・行そのままに翻刻した。算用数字は行数を表す。

*【国】と【学】や【千】との間に異同がある場合は、【国】に傍線を施し、すぐ左側に【学】、その次の行に【千】の本文を示した。なお、【国】や【学】に文字が記されているが、【千】に何も記されていない場合は「×」で示した。
第三節「考察」で取り上げる例については、右側に「」をつけ、その後に第三節で掲載するさいの番号を付した。

《翻刻・本文》

五丁裏

- 1 けりそれをかくおにとはいふなりけりまたいとわかう

2 てきさきのたゝにおはしける時とや

3 ^{〔七段〕}むかし男 有 けり京にありわひてあつまにいき

七 おとこあり

× おとこあり

4 けり ^{〔4段〕}伊勢おはりのあはひのうみつらをゆくになみ

けるにいせ

浪

けるに伊勢

なみ

5 いとしろくたつを見て

く

う

6 いと、敷 過行 かの恋 しきに浦 山 敷 もかへるなみかな

後撰 しくすきゆくかた こひ うら山 しく かな

× しくすきゆく方 こひ うらやましく 哉

7 となんよめりける

む

む

8 ^{八段}むかしおとこありけり京やすみうかりけんあつま

八 有 ん

× あり む

9 のかたにゆきてすみ所もとむとてともとする人

方

かた

10 ひとりふたりしてゆきけりしなの、国あさまのたけ

くに

くに

六丁表

1 にけふりのたつを見て

2 しなのなるあさまのたけに立煙 遠近 人のみやはとかめぬ

古今 たつ煙 をちこち人 見

× たつけふりをちこちひと 見

3 ^{五段}むかしおとこ有^レけりそのおとこ身をえうなき物

九 あり 物

× あり もの

4 に思ひなして京にはあらしあつまのかたにすむ

× 方

× 方

5 へき国^レもとめにとてゆきけりもとよりともと

くに 友

くに とも

6 する人ひとりふたりしていきけりみちしれる人

7 もなくてまとひいきけりみかほの国^レやつはしと

くに

くに

8 いふ所にいたりぬそこをやつはしといひけるは水

9 行川ゆくがわのくもてなれば橋はしをやつわたせるにより

ゆく河 はし

ゆく河 はし

10 てなんやつはしといひけるその澤さわのほとり

む さは

む さは

六丁裏

1 の木のかけにおりゐてかれいひくひけりその澤さわに

さは

さは

2 かきつはたいとおもしろくさきたりそれを見て

見て

みてある人のいはくかきつはたといふいつもしを
おもしろくさきたりそれを××

3 ある人のいはくかきつはたといふいつもしをくの

ある人のいはくかきつはたといふいつもしを

××××××××××××××××××××××

4 かみにすへてたひの心をよめといひければよめる

5 から衣きつ、なれにしつましあれははるくきぬる旅をしそ思ふ
古今 × たひ ×

6 とよめりければみな人 かれいひのうへに涙 おとして
人 なみた × たひ ×

ひと なみた

7 ほとひにけりゆきく、てするか国 にいたりぬう

くに、
くに、

8 つの山にいたりてわかいらむとする道 はいとくらうほ

みち
みち

9 そきにつたかえてはしけりもの心 ほそくてす、

物心 ×
ものこゝろ ×

10 ろなるめをみるこゝ、おもふにす行者*(1)にあひたりかゝる*(2)

見 思 ×
見 おも ×

七丁表

1 道はいかてかいまするといふをみれば見し人なりけり

みち 見 ひと
みち 見 人

2 京*(3)にその人のもとにとてふみかきてつく*(2)

御 御

3 するかなるうつの山辺のうつゝにも夢にも人にあはぬ成けり

新古今 へ ゆめ 人 なり
× 辺 ゆめ ひと なり

4 ふしの山をみればさ月のつこもりに雪いとしろうふ

見 見

5 れり

6 時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこまたらに雪ゆきのふるらん

新古今

ゆき ん

×

雪 ん

7 その山はこゝにたとへはひえの山をはたちばかりかさね

はかり

許

8 あけたらんほとしてなりはしほしりのやうになん有*[し]

ん しほしり んあり

む しほしり んあり

※【学】「しほしり」の左側に二行にわたって以下の傍記がある。

或説云塩尻壺塩といふ物あり其尻似此山此語之習故

好卑詞寂蓮殊信用此説或本はしりほしの

9 けるなをゆきくへむさしの国としもつふさの

猶 武蔵 くに

なを むさし くに

※【学】「ける」の下に割注として以下の「先人ありなん」までの二行、本文の左に「往年云々」の傍記が行で記されている。

先人命縦雖為塩事凡卑也

不可用之心えすとてありなん

往年有尋問人答慥不知由云々

10 くにとの中にいとおほきなる河ありそれをす

七丁裏

1 みた川といふその河のほとりにむれるて思ひやれはかき

河 河 おも おも

河 河 おも おも

2 りなくとをくもきにけるかなとわひあへるに

3 渡守 ははや舟 にのれ日もくれぬといふにのりてわた

わたしもり ふね

わたしもり ふね×

4 らむとするにみな人 ものわひしくて京におもふ

人物 思

ひともの おも

5 人なきにしもあらずさるおりしもしろき鳥 の

とり

とり

6 はしと足 とあかきしきのおほきさなる水 のうへに

あし みつ

あし 水

7 あそひつゝいをくふ京には見えぬ鳥 なれはみな

とり

とり

8 人見しらすわたしもりにとひければこれなんみ

ん宮

む宮

9 や|ことりといふをきゝて

10 名にしおはゝいさことゝはん宮こ鳥|わかおもふ人は有|やなしやと

古今

事と む 鳥

あり

× ことゝ む とり

あり

八丁表

1 とよめりければ舟|こそりてなきにけり

舟

ふね

2 ^{千鹿}むかし男|むさしのくにまてまどひありきけりさ

十 おとこ武蔵

× おとこむさし

3 てそのくに、ある女をよはひけりち、はこと人にあは

4 せんといひけるをは、なんあてなる人に心つけたりける

む

ん

む

む

5 ち、はなほ人にては、なん藤はらなりけるさてなん

お

んふち

ん

お

むふち

む

6 あてなる人にと思ひけるこのむこかねによみて

思

おも

7 をこせたりけるすむ所なんいるまのこほりみよし

所

む

ところ

む

8 の、さとなりける

9 みよしのゝたのむのかりもひたふるに君かゝたにそよるとなくなる

きみ

きみ

10 むこかねかへし

返

かへ

八丁裏

1 我かたによるとなくなるみよしのゝたのむの雁をいつか忘

わか方

の

かり

わすれん

わか方

野

かり

わすれむ

2 となん人のくにゝてもなをかゝる事なんやまさりける

猶

こと

猶

事

3 ^{千一}むかし男あつまへ行けるにともたちともにみち

十一昔おとこ

ゆき

友

× 昔おとこ

ゆき

とも

4 よりいひをこせける

5 わするなよ程 は雲 ゐに成 ぬとも空 行 月のめぐり逢 まで

拾遺 ほと 雲 なり そらゆく あふ

× ほと くも なり そら行 あふ

6 ^{十二段} むかし男 有けり人のむすめ ^{*4④} ぬすみてむさし野へ

十二 おとこ を むさしの

× おとこ を 武蔵野

7 ゐてゆくほとにぬす人なりければくにかみに

8 からめられ ^{*4⑤} けり女をは草 むらの中 にをきて

に くさ なか

に くさ 中

9 にけにけりみちくる人 ^{*4⑥} のこの野はぬす人あ

ひと× 野

人× 、

10 なりとて火つけんとす女わひて

む む

九丁表

＊し③

1 武蔵 のはけふはなやきそ若 草 のつまこもれり我 もこもれり

古今 むさし
カスカノ

わかくさ

われ

むさし

わかくさの

我

2 とよみけるをきゝて女をはとりてともになてい

3 にけり

4 十三段 むかしむさしなる男 京なる女のもとにきこゆれ

十三昔武蔵

おとこ

× 昔武蔵

おとこ

5 は、つかしきこえねはくるしとかきてうはかきに

6 むさしあふみとかきてをこせてのち*(17)はをともせず

× ×

7 なりにければ京より女

8 むさしあふみさすかにかけてたのむにはとはぬもつらしとふもうるさし

9 とあるを見てなむたへかたき心注5ちしける

地 地

10 とへはいふとはねはうらむ、さしあふみかゝるおりにや人はしぬらん

む、 ひと むん
人 ひと むん

九丁裏

1 千四郎 むかし男 | みちのくに、すゝろにゆきいたりにけり

十四 おとこ

× おとこ

2 そこなる女京の人 | はめつらかにやおほえけんせちに

ひと

ん

人

む

3 おもへるこゝろなむ有 | けるさてかの女

心

あり

心

あり

4 中 | く | に恋 | にしなすはくはこ*(し)にそなるへかりける玉 | のをはかり

入万葉中

恋

くはこ桑故 兼也

たま

× なか

こひ

くはこ

たま

5 うたさへそひなひたりけるさすかにあはれとやおもひ

6 けむいきてねにけり夜ふかくいてにければ女

7 夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたきになきてせなをやりつる

東国の習家ラフタト云
きつにはめなてくたかけ

家鶏也

きつにはめなてくたかけ

8 といへるに男 京へなむまかるとて

おとこ

おとこ

9 くりはらのあねはの松の人ならば都 のつとにいさといはまし

わ本
はれ

みやこ

を

はれ

宮こ

を

10 といへりければよろこほひて思ひけらしとそいひをり

おも

おも

十丁表

1 ける

2 ^{十五段}むかしみちのくに、^{＊し}なてうことなき人のめにかよひける

十五むかし

て

× 昔

て

3 にあやしうさやうにてあるへき女ともあらず見えければ

4 忍 山しのひてかよふ路 もかな人のころのおくもみるへく

しのふ

道 哉 人 心

見

忍

みち かなひと 心

見

5 女かきりなくめてたしとおもへとさるさかなきえひすこ、

こ、

心

6 ろを_レみ_レてはいかゝはせむは

ろ 見

見

7 ^{千六段}むかしきのありつねといふ人_レ有_レけりみよ_レのみか_レとにつ

十六

有 世

×

あり よ

8 かうまつりて時にあひけれと _世かはり時うつり_{けれは}

のちは _に

のちは _に

9 よのつねの _{こと} _{あらず人}からは心うつくしう_{あて}

世のつねの人のことも

く

世のつねの人のことも

う

10 はかなることをこのみて_{こと}に_人にもにすまつしく

×

に

十丁裏

1 へても猶むかしよかりし時の心なからよのつね

むかし

よ

昔

世

2 のこともしらすとしころあひなれたる*(じ)⑧やうくどこ

あひなれたるめ

あひなれたるめ

3 はなれてつゐにあまになりてあねのさきたち

4 てなりたる所へゆくを男まことにむつまじき

ところ

おとこ

ところ

おとこ

5 事こそなかりけれいまはとゆくをいとあはれと思
こと

事

6 けれどまつしければするわさもなかりけり思ひ

おも

おも

7 わひてねんころにあひかたらひけるともたちのも

む

む

8 とにかうくいまはとてまかるをなにこともいさか

9 なる事 もえせてつかはすことゝかきておくに

こと

こと

10 手を折てあひみしことをかそふれはとおといひつゝよつはへにけり

ゝり

ゝり

見事

見こと

三、考察

第二節において【国】【学】【千】の異同を確認してきた。その結果、表記においては違う点が多数見られるものの、

全体として大きな異同は少なかった。以下、表記と解釈などに関わる異同の順に確認する。なお、本稿では音便は異同として扱わなかった。

まず、表記についての傾向としては、以下の「1」「2」の二点が確認された。

「1」仮名・漢字表記については、【国】は他の二本よりも漢字を使用する割合が多いが、【国】が仮名としているところを【学】や【千】が漢字としているところもあるのは、前稿の範囲（二丁表から五丁表）までと同じであった。

「2」【国】は前稿の範囲（二丁表から五丁表）と同様に、和歌の表記に関しては、ほぼ一行におさめていた。

【学】は和歌が二行にわたって（一行目に上の句、二行目に下の句）書かれている。また、一行目と二行目の間、和歌よりも高い位置に「新古今」「古今」などの注記がある箇所がある点も前稿と同じである。ただし、九丁裏7行目「夜もあけは……」の歌については、三行にわたっている。

【千】は前稿の範囲（二丁表から五丁表）と同様に和歌が二行にわたっていた。また、前稿と同様に一文字空けて地の文に続く例もあり、七丁裏10行目「名にしおは、……」、九丁表1行目「武蔵のは……」、九丁裏9行目「くりはらの……」が該当する。なお、本稿の範囲では、一文字空けず直接に地の文につながっているものとして、八丁裏1行目「我かたに……」九丁表8行目「むさしあふみ……」があった。また、六丁裏2～3行目の【国】【学】「見てある人のいはくかきつはたといふいつもし」は、【千】は本文のサイズよりも小さい字で傍記の形で記入されていた。

次に、解釈などに関わる異同を、前稿と同様に以下の(1)～(4)に分類した。

(1) 【国】【千】にはないが【学】のみにある注記

【学】には本文の上に段数が注記され、以下の①～⑥については、本文の左右や下に注がつけられている。しかし、これらは【国】【千】にはない。

①七丁表8行目…「しほしり」の左側に二行にわたって傍記がある。

或説云塩尻壺塩といふ物あり其尻似此山此語之習故

好卑詞寂蓮殊信用此説或本はしりほしの

②七丁表9行目…「ける」の下に割注として以下の「先人ゝありなん」までの二行、本文の左に「往年ゝ云々」の傍記が一行で記されている。

先人命縦雖為塩事凡卑也

不可用之心えずとてありなん

往年有尋問人答慥不知由云々

③九丁表1行目…「古今」の左側に「カスカノ」と記されている。

④九丁裏4行目…「くはこ」の右側に「桑子 蚕也」の傍記がある。

⑤九丁裏7行目…「きつにはめなて」の右側に「東国の習家ヲクタト云」の傍記がある。

⑥九丁裏7行目…「くたかけ」の左側に「家鶏也」の傍記がある。

前稿の範囲で（1）の項目に分類されたのは人物についての注のみであったが、本稿の範囲ではすべて人物以外についての注であった。

（2）文の終止など文法にかかわる例。

前稿の範囲には三例あったが、本稿の範囲にはなかった。

（3）意味が変わる例

意味が変わるものとしては、以下の三例があげられる。

①六丁表10行目：【国】【学】「澤／さは」、「千」「さと」となっている。【千】は「里のほとり」で「里の近く」と解釈できそうではあるが、次行の六丁裏1行目は【千】も「さは」になっており、【千】の誤字ではないかと考えられる。

②七丁表2行目：【国】「人のもとに」、【学】【千】「人の御もとに」となっている。どちらでも解釈は可能だが、【学】【千】は敬意が入っているので、ここで手紙を送っている相手は高貴な人、例えば業平の恋の相手である藤原高子などの女性が視野に入ってくる表現となる。

③九丁裏9行目：【国】「あねは」、【学】「あれは」、【千】「あれは」となっている。【国】と【学】の傍記の「あねは」は「姉菌」で解釈できるが、「あれは」では意味が通らない。

この三例のうち、②をのぞく二例は、いずれも【国】と【学】（傍記の例を含む）が【千】よりもすぐれた本文であると言える。

(4) その他の例

異同は認められるが、解釈がそれほど変わらない、あるいはどちらでも解釈が可能な例としては、以下の①～⑭の一四例があげられる。

①五丁裏4行目：【国】「けり」で文が終止するところ、【学】【千】「けるに」となり、次につながっている。解釈としては【国】「東国に行った。」、【学】【千】「東国に行ったところ。」、どちらでも解釈は可能である。

②六丁裏10行目：【国】「す行者にあひたり」は【学】【千】「す行者あひたり」となっている。どちらでも解釈は可能だが、【国】は助詞「に」がある分、格関係がわかりやすくなっている。

③七丁裏3行目：【国】【学】「舟に／ふねに」、【千】「ふね」となっている。どちらでも解釈は可能だが、【国】【学】は(4)②と同様に助詞「に」がある分、格関係がわかりやすくなっている。

④八丁裏6行目：【国】「人のむすめぬすみて」、【学】【千】「人のむすめをぬすみて」で、どちらでも解釈は可能であるが、【学】【千】は助詞「を」がある分、格関係がわかりやすくなっている。(4)②③では【国】のほうに助詞があったが、ここは逆に【学】【千】に助詞がある。

⑤八丁裏8行目：【国】「からめられにけり」、【学】【千】「からめられけり」となっている。それぞれの解釈は【国】「か

らめられてしまった」、「学【千】「からめられた」で完了の助動詞「ぬ」の有無による解釈の違いはあるが、意味が逆になるなど大きな違いはない。

⑥ 八丁裏 9 行目：【国】「人の」、「学【千】「人／ひと」となっている。どちらでも解釈は可能だが、【国】は助詞「の」がある分、格関係がわかりやすくなっている。これは(4) ②③と同じである。

⑦ 九丁表 6 行目：【国】「のちは」、「学【千】「のち」となっているが、どちらでも意味は変わらない。この例も(4) ②③⑥と同様に【国】には助詞があるが、他の本には助詞がないものがある例である。

⑧ 九丁裏 9 行目：【国】「いはまし」、「学【千】「いはましを」となっている。詠嘆・感動の終助詞「を」の有無による意味の違いはあるが、意味が逆になるなど大きな違いはない。

⑨ 十丁表 2 行目：【国】「くに」、「学【千】「くに、て」となっている。格助詞「に」と格助詞「にて」の違いはあるが、いずれにしても、ここでは場所を意味しており、意味に違いはない。

⑩ 十丁表 8 行目：【国】「世かはり」、「学【千】「のちは世かはり」となっている。それぞれの解釈は【国】「世が変わり」【学【千】「(その) 後は世が変わり」となり、どちらでも解釈は可能である。

⑪ 十丁表 8 行目：【国】「うつりければ」、「学【千】「うつりにければ」となっている。それぞれの解釈は【国】「移ったので」、「学【千】「移ってしまったので」である。(4) ⑤と同様に、完了の助動詞「ぬ」の有無による解釈の違いはあるが、意味が逆になるなど大きな違いはない。

⑫ 十丁表 9 行目：【国】「よのつねのことあらず」、「学【千】「世のつねの人のこともあらず」となっている。解釈は【国】「世間一般のことはなく」、「学【千】「世間一般の人のようでもなく」となる。どちらでも意味は通じ、意味が逆になるなど大きな違いはない。

⑬十丁表10行目…【国】【千】「ことに人にもにす」、【学】「こと人にもにす」となっている。解釈は【国】【千】「特に他の人にも似ず」、【学】「他の人とも似ていない」で、「ことに」と「こと」で解釈が違うということはあるが、どちらでも他人とは違うという趣旨のことを言っている。

⑭十丁裏2行目…【国】「あひなれたる」、【学】【千】「あひなれたるめ」となっている。「め」は「妻」のことだが、なくても後文から妻のことであるとわかり、【国】は「妻」が省略された形として読むことができる。

以上、和歌については「2」に記したように各本で表記が違っており、【学】【千】については細かい点では前稿の範囲と異なる表記の仕方もあった。また、(1)の【学】の特異な注記は本稿の範囲でも同様にあった。これらをのぞいた「1」(3)(4)からわかる傾向としては、【国】が孤立して【学】【千】が一致していることが多いということであった。ただし、(3)①(4)③のように【千】が孤立している例や、(4)⑬のように【学】が孤立している例もあった。これは前稿の範囲についての調査結果とほぼ同じである。

なお、前稿の範囲では、【国】よりも【学】【千】のほうが文法的に正しい、あるいは文脈に則っている例として四例が確認されたが、本稿の調査範囲では、(3)①は【国】【学】のほうが【千】よりも、(3)③では【国】(【学】は傍記が【国】と一致)のほうが【千】よりも、前後の文脈から推定して妥当な本文になっているという結果となった。

四、むすび

本稿では、室町末期の書写とされる『伊勢物語』の国士館大学蔵本の五丁裏から十丁裏の十一ページ分について翻刻を行い、学習院大学蔵本と千歳文庫蔵本との異同を確認してきた。

その結果、例外もあったが、前稿の範囲と同じく学習院大学蔵本と千歳文庫蔵本が一致し、国士館大学蔵本が孤立している例が多かった。ただし、前稿の範囲では国士館大学蔵本が学習院大学蔵本と千歳文庫蔵本よりもすぐれている例はなかったが、本稿の範囲では国士館大学蔵本と学習院大学蔵本が一致し、千歳文庫蔵本よりもすぐれた本文を有している例が二例あった。

このように、概ね、前稿の範囲と同じ傾向ではあるが、異なる点もあることから、次年度以降、より範囲を広げて検討を続け、国士館大学蔵本の位置づけをさらに明らかにしていく所存である。

(注)

(1) 松野彩・二〇二二年度中古ゼミ四年生「国士館大学蔵『伊勢物語』の研究 (一)」（国士館大学国文学会編『國文學論輯』四四、二〇二三年三月）をさす。以下も同じ。調査対象は二丁表から五丁表である。

(2) 小林茂美校注『影印校注古典叢書6 伊勢物語』（新典社、一九七五年）によって本文を確認した。学習院大学蔵本は、現在、最善本とされ、小学館の新編日本古典文学全集の『伊勢物語』の底本となっている。

(3) 正徹奥書、蜷川智蘊筆。片桐洋一編『影印本シリーズ 伊勢物語』（新典社、二〇一六年改訂版）によって本文を確認した。

(4) 以下、本稿で「前稿」と言う場合は注1の論文をさす。

(5) 【国】「たる」に読めそうだが、近くにこの形で「ける」の例があるので「ける」とした。なお、この部分、【学】「千」は「ける」になっている。

※この写本を中古ゼミの学生と一緒に翻刻することになったのは、本学・中村一夫教授のすすめによる。ここに感謝の辞を述べる。

※翻刻は五丁裏（安倉舞）、六丁表（北川瑤）、六丁裏（武田優衣）、七丁表（山中澄玲）、七丁裏（中村桜）、八丁表（照内美海）、八丁裏（伊福くりあ）、九丁表（川崎蓮也）、九丁裏（鈴木健太朗）が担当し、松野彩が修正を施した。なお、九段（八丁表一行目）までは学内研究会での中村教授による翻刻を参照した。

〔キーワード〕 伊勢物語 国士館大学蔵本 国士館大学蔵伊勢物語 写本 翻刻